

各位

2023年11月13日  
日本独文学会西日本支部  
支部長 竹岡健一

## ドゥルス・グリーンバイン講演会のお知らせ

### Lesung aus *Jenseits der Literatur. Oxford Lectures* und Gespräch von Durs Grünbein

日本独文学会西日本支部では、成城大学国際編集文献学研究センターとの共催で、ドイツを代表する詩人ドゥルス・グリーンバイン氏をお迎えして、自作朗読を中心とする講演会をドイツ語（一部、日本語解説あり）で開催します。出席希望の方は、下記にてお申し込み下さい。なお、日本独文学会西日本支部非会員の方は、オンライン会場のみ参加可能です。 Die Japanische Gesellschaft für Germanistik-Westjapan lädt zum Vortrag von Herrn Durs Grünbein ein. Der renommierte deutsche Dichter wird seinen Essay *Jenseits der Literatur. Oxford Lectures* vorstellen.

#### 記

日時	2023年12月9日（土）16:10～17:10 Samstag, 9. Dezember 2023, um 16:10 Uhr
第1会場	福岡大学七隈キャンパス・文系センター棟 15階第6会議室 〒814-0180 福岡市城南区七隈 8-19-1 Universität Fukuoka, Nanakuma-Campus, Bunkei Center, 15. Etage, Konferenzraum 6
第2会場	オンライン会場（後日、URLをお知らせします）
招待講師	<b>Durs Grünbein</b> ( <a href="https://de.wikipedia.org/wiki/Durs_Grünbein">https://de.wikipedia.org/wiki/Durs_Grünbein</a> )
講演内容	„Jenseits der Literatur. Oxford Lectures“ (Suhrkamp: Berlin 2020)
参加方法	オンラインでの参加希望者は下記事務局にお名前とご所属を 11月30日までにご連絡ください。 Anmeldung: per E-Mail bis zum 30. November
事務局	保坂直之 (Prof. Dr. Naoyuki Hosaka) E-Mail: <a href="mailto:hosaka[at mark]kagoshima-ct.ac.jp">hosaka[at mark]kagoshima-ct.ac.jp</a>

共催



成城大学  
国際編集文献学研究センター  
Research Center for Textual Scholarship  
Seijo University

ドゥルス・グリーンバイン『文学の彼方で オックスフォード講義』について  
小黒康正（九州大学）

現代ドイツを代表する詩人ドゥルス・グリーンバイン氏が2023年12月8日(土)に福岡大学で自作朗読を中心とする講演を行います。同氏は、ゲオルク・ビューヒナー賞(1995)、ニーチェ賞(2004)、ヘルダーリン賞(2005)、ドイツ連邦共和国功労勲章賞(2009)などの受賞者であり、現代ドイツを代表する世界的な詩人です。彼の詩集やエッセイは世界各国で翻訳されており、邦訳としては『ドゥルス・グリーンバイン詩集』(縄田雄二編訳、中央大学出版会、2004年)があります。

福岡大学での講演は、2020年にドイツで上梓された『文学の彼方で オックスフォード講義』(Durs Gruenbein: *Jenseits der Literatur: Oxford Lectures*. Berlin: Suhrkamp 2020.)に基づく内容です。つまり、グリーンバイン氏が2019年にオックスフォード大学で行った講演をドイツ語で再現するものになります。オックスフォード大学で1993年以来毎年行われている講義は、「ヴァイデンフェルド卿講義」と称されている比較文学関連の企画です。これまで、ジョージ・スタイナー、マーサ・ヌスバウム、ウンベルト・エーコ、マリオ・バルガス・リョサなど、世界的に著名な作家、詩人、哲学者などがオックスフォードに招待されてきました。

グリーンバイン氏の『文学の彼方で』は、自らの経験に基づいてドイツの過去を問う四部構成の著作です。アドルフ・ヒトラーの肖像画を載せたナチス時代の切手をめぐるさまざまなエピソードから著作は始まります。幼年時代に祖父の家でヒトラーの切手をたまたま見つけたことは、詩人にとって特異な体験であり、ナチス問題を考える重要な契機になりました。次いで「大統領の道路」であるアウトバーンとそれを写し出した写真にも話が及びます。次の話題はドレーズデン爆撃とそれを可能にした航空写真です。飛行機の機内からロンドン市内が見えたとき、グリーンバイン氏は自身の故郷ドレーズデンがかつてイギリスによって無差別爆撃を受けたことを思い出しました。氏はかなり抑制の効いた言葉で話したようですが、オックスフォード講演の中で、少なくとも聞き手にとって、かなり微妙なテーマだったはずですが、そして最後は、やはり幼年期に間近にみたソ連の戦車や兵士、そして東独時代の学校において行ったニュルンベルク裁判をめぐる報告を通じて、講演は歴史家論争や修正主義の問題などドイツ人にとって最も微妙なテーマに行き着きます。このように講演では、ナチスという過去がグリーンバイン氏自身の体験や写真や自動車に代表される新しい技術を通じて、私たちの現在において現前化されるのです。つまり、ミクロとマクロの絶妙な混淆から過去が現在として立ち上がってくると言えましょう。

